

学ぶことを楽しむ児童の育成 ～学びを自分事とするための授業づくりを通して～

1 研究経緯

(1) 昨年度の研究内容と、成果と問題

昨年度は「学ぶことを楽しむ児童の育成」を掲げ、個別最適な学びと協働的な学びを軸に授業改善に取り組んだ。その結果、学習活動における選択・決定権を子ども自身に委ねたことで従来の受け身の姿勢から脱却し、納得いくまで追究する「自分事」としての主体的・自律的な姿が見られた。また、自分とは異なる考えをもつ他者との対話により思考を広げ深める姿や、毎時間の振り返りを次時の新たな問題へつなぐ柔軟な単元構成により、子ども自身が単元を切り拓いて自走する躍動感のある授業が実現できた。

一方で、継続的な実践を通して指導上の問題も明らかになった。「個別最適」「協働的」という広範な概念を学級の実態に即した指導の手立てへとさらに焦点化し、目指す姿ごとに再整理する必要があった。また、限られた45分間の授業枠に固執するあまり個の探究と全体での共有のバランスに困難さを感じたため、今後は単元全体を見通して二つの学びを一体的にデザインする時間配分の見直しも求められた。

2 今年度の研究について

(1) 主題設定について

情報化の急進に伴い、教育の価値は、単に「多くの知識を記憶していること」から、「確かな知識を基盤としつつ、それをいかに活用して未知の問題を解決するか」という資質・能力へと劇的にシフトしている。もちろん、科学的な思考を支えるのは基礎、基本となる知識であり、その習得の重要性は揺るぎない。しかし、予測困難な時代を自立的に生き抜く子どもたちには、

習得した知識をバラバラな情報のまま終わらせず、それらを結びつけ、根拠をもって未来を切り拓く力が不可欠である。これは、全国小学校理科研究協議会の大会主題である「グローバル社会を生き抜く児童の育成」の実現において、極めて重要な視点である。

こうした社会の変化や求められる資質・能力を見据え、本校では、子どもたちが自ら問題を見だし、未知の問題に主体的・協働的に立ち向かう姿を目指して、主題「学ぶことを楽しむ児童の育成」を設定した。

(2) 研究主題について

本校が目指すのは、受動的ではなく、問題解決の過程を子どもが自らの知的な衝動として楽しむ姿である。「なぜだろう」という驚きや疑問から始まり、試行錯誤するプロセスそのものに価値を見いだすこと。これこそが、本校の考える「学ぶことを楽しむ」姿である。

「学ぶことを楽しむ」とは、教師主導の受動的な学習ではなく、自らの知的好奇心によって問題を「自分事」と捉え、壁にぶつかっても試行錯誤を重ねる粘り強さを発揮することである。試行錯誤そのものを楽しむ経験は、自らの学び方をコントロールする自己調整力を育み、「自ら答えを創り出す楽しさ」を知る自律的な学習者への成長を促す。このように、「学ぶことを楽しむ」経験の蓄積は、自律的な学習者を育て、未知の課題に妥当な選択を下せる「汎用的な資質・能力」の基盤となる。だからこそ、児童が知的衝動で試行錯誤を重ねる姿を目指す本研究主題は、未来を切り拓く教育において大きな価値をもつと考える。

(3) 研究副題について

研究主題「学ぶことを楽しむ児童の育成」の達成に向け、副題を「学びを自分事とするための授業づくりを通して」と設定した。これは児童の「学び(自分事とする)」と教師の「指導(授業づくり)」の両面を示したものであり、千葉大会スローガンである「学びと指導の調和」を具現化するものである。学びを「自分事」とするためには、「個別最適な学び」を通して児童が自らの思いや願いを実現し、自身の成長や学びの有用性を実感することが不可欠である。さらに、「協働的な学び」を通して他者の考えのよさに気づき、自身の思考を広げ深めるとともに、学んだことを身近な事象と結び付けてその有用性を実感することが重要であると考えた。

なお、全職員が目指す児童像を共通理解し、一貫した指導を行うために、理科・生活科における「学びが自分事となっている児童の具体的な姿」をあらかじめ視点ごとに明確にし、実践の指標とした。

(4) 研究の視点

「学ぶことを楽しむ児童の育成」を目指し、昨年度までの実践で見いだされた問題をふまえて、今年度は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を、児童の具体的な姿に即した4つの視点へと焦点化した。具体的には、「個別最適な学び」を視点1「学びの自己決定」・視点2「学び方の調整」、「協働的な学び」を視点3「多様な他者との学び合い」・視点4「学びと日常生活の関係付け」と定義する。この焦点化により、教師にとっては有効な指導の手立てを明確化し、児童にとっては思考を寸断しない豊かな探究時間を保障することが可能となる。45分間の授業枠に固

執せず、単元全体で二つの学びを一体的にデザインすることで、実践上の負担軽減と再現性の高い確かな指導技術の確立を両立させていく。

視点1

学びの自己決定



「学びの自己決定」とは、児童が自分の思いや願いを実現していくことである。そのためには、自ら問題を見だし、学ぶ方法やそれを追求する方法を選択しながら、他者との関わりを通して考えを深め、振り返りを重ねて次の学びにつなげていくことが重要である。

その実現に向けて、教師は問題を生み出す場面を設定したり、学習方法や問題を選択できる機会を設けたりするなど、児童が主体的に学びに向かうことができるよう支援する必要がある。また、児童が問題をもち続けられるような単元構成の工夫をするとともに、興味・関心を高める教材や、多様な学び方を選択できる教材を用意することも重要である。さらに、対話や振り返りの場を通して自分の学びを見つめ直し、自ら学びを調整しながら次の学びへとつなげていけるよう支援していく。

学びを自己決定する姿

理科	生活科
・問題を見いだすことができる ・根拠を基に、仮説・予想を立てることができる ・見通しをもつことができる	・思いや願いをもち、試行錯誤を楽しむことができる

【具体的な手立て(例)】

- ・自己選択・自己決定を可能にする単元構成、多様な学習形態の工夫
- ・児童が問題を見いだすことができる導入の工夫
- ・児童が自身の力で解決が可能な問題の工夫

視点 2

学び方の調整



「学び方の調整」とは、毎時および単元末の振り返りを深化させ、児童が自らの学びを調整する力を育むことである。具体的には、理科等の実験結果に基づき「何が問題か」を見つめ直し、再挑戦する試行錯誤のプロセスを重視する。この過程で自己の成長や変容に気付き、喜びを実感することで、学びの価値をメタ認知(自分事)し、次時の探究へとつなげていく。こうした自律的な調整の反復により自己肯定感を高め、生涯にわたって学び続ける「よりよい学習者」としての資質を養う。

学び方を調整する姿

理科	生活科
・実験の結果を基に方法を見直すことができる ・本時の学びを振り返り、次の学習につなげることができる	・成長を実感し、新たな思いや願いへとつなげることができる

【具体的な手立て(例)】

- ・自己の成長に気付いたり、学びの有用性に気付いたりするための振り返りの工夫
- ・失敗を価値付けるための再挑戦の場の設定

視点 3

多様な他者との学び合い



「多様な他者との学び合い」とは、学級の仲間をはじめとした他者との対話や考えの交流を通じ、自己の思考を深める姿を目指すことである。そのために、児童が考えを積極的にアウトプットする機会を確保し、目的に応じた対話の形態や協働作業の場を工夫して設定する。活動の基盤として、安心して表現できる対話のルールやマナーを確立し、互いの存在を尊重し合え

る学級において心理的安全性を醸成する。さらに、1人1台端末を効果的に活用したり、外部機関や専門人材とつながったりすることで、多様な視点を取り入れ、個人の気付きを多角的な視点へと更新できるようにする。

多様な他者との学び合いをする姿

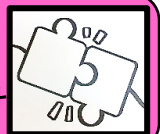
理科	生活科
・他者の意見を取り入れ、自分の考えをよりよくすることができる ・他者の意見を参考にし、実験方法を考えることができる ・他者の意見を参考にし、規則性を見付けることができる	・他者と関わり合うことで、自分の視野を広げることができる ・多様な視点を取り入れ、自分の考えを再構築することができる

【具体的な手立て(例)】

- ・アウトプットする機会の工夫(単元構成の工夫、発表形式、方法等)
- ・多様な考えを交流するための伝え合う場の工夫(構成、人数、ルールやマナー等)
- ・学びを広げるための外部機関、人材との連携
- ・他者と学ぶことで、多様な視点や考え方に触れ、学びが深まることに気付くための振り返りの工夫

視点 4

学びと日常生活の関係付け



「学びと日常生活の関係付け」とは、学校で得た知識や技能を、自身の生活や社会の事象と関連付け、学びの有用性を実感する姿を目指すことである。理科・生活科の学びが「自分たちの暮らしをよりよくするためにどう生かせるか」という視点を持ち、学んだことを実生活の問題解決に活用したり、新たな興味・関心へと広げたりする場面を重視する。こうした学びと生活の往還を通じ、「知る喜び」だけでなく「使える手応え」を味わわせることで、学びを自分事と

させていく。自らの学びが社会や将来の自分とつながっていることを自覚することは、学習への持続的な意欲を育み、実社会を生き抜く確かな資質・能力へつながるものである。

(5) 付けたい4つの力

「学びの自己決定」や「学び方の調整」を通して、児童が思いや願いを実現させ、自身の成長や学びの有用性に気付くには、日々の学習の中で自己決定や自己選択等の力を意識させる必要がある。また、「多様な他者との学び合い」や「学びと日常生活の関係付け」を通して、思考を深めたり学びの有用性に気付いたりするためには、他者と学び合う力や学びを社会とつなげる力を身に付けていく必要がある。そこで、児童に身に付けさせたい力を視点と関連付けて4つに整理するとともに、視覚的にも捉えやすいようアイコン化した。身に付けたい力を教師と児童が共有することで、児童自身が働かせている力や身に付いた力を認知し、目指す児童像に迫ることができると考えた。

学びと日常生活の関連付けをする姿	
理科	生活科
・理科と日常生活をつなげて考えることができる ・本時の学びをこれからの日常生活につなげることができる	・学んだことと、自分たちの日常生活につながりがあることに気付くことができる ・「まとめ・伝える」ことで、自然や地域への視野を広げることができる
【具体的な手立て（例）】	
・学習した科学的原理が、日常生活のどこで使われているかを考える場面の工夫 ・学習した知識を「道具」として使い、日常生活を改善するアイデアを考える場面の工夫 ・地域の自然環境を科学の目で捉え直し、保護や活用について考える場面の工夫 ・学習したことを家や学校で実践し、自分が役に立っている実感を味わわせるための工夫 ・地域の人材や施設との連携 ・地域の施設や人々との交流を通じ、地域の一員としての自覚を育てるための工夫	

付けたい力	呼び方
・自己決定の力 ・自己選択の力	決める力 
・自己理解の力・自己実現の力 ・自己調整の力	見つめる力 
・多様な他者と学び合う力	関わる力 
・学んだことを日常生活と関係付ける力	つなげる力 

【付けたい力 教師用】

決める力 	まな し き じぶん えら じぶん き ・学びたいこと、知りたいことを決めよう。 ・自分で選ぼう ・自分で決めよう。 じぶん けいやく た しっぱい かた か いちどうせん せん ・自分で計画を立てよう。 ・失敗しても、やり方を変えてもう一度挑戦しよう。
見つめる力 	み ・できるようになったことを見つけよう。 ・まだできないこと・わからないことを見つけよう。 みかた かた か いちどみ ・見方、やり方を変えて、もう一度見つめよう。
かかわる力 	じぶん かんが つた あいて き も かんが ・自分の考えを伝えよう。 ・相手の気持ちを考えよう。 ともだち かんが たいせつ ともだち かんが ・友達の考えを大切にしよう。 ・友達の考えとくらべよう。 ともだち ともだち み ・友達のよさをまねしよう。 ・友達のよさを見つけよう。 かんが ・みんながなっとくをするか考えよう。
つなげる力 	まな せいけつ さが まな せいけつ つか ・学んだことは生活とつながるか探そう。 ・学んだことを生活で使ってみよう。 まな じぶん こうどう か まな ま ・学んだことから自分の行動を変えていこう。 ・ちいさから学ぶよさを見つけよう。

【付けたい力 児童用】

(6) 特色ある活動

本校では、理科好きを増やすために2つの活動に取り組んでいる。

①サイエンスナビ

児童や保護者の理科に対する関心を高める取組として、身近な自然や科学的現象を紹介する「サイエンスナビ」を全家庭に向けて配付している。校内の植物や季節の星座など、児童の日常生活に即した話題を取り上げることで、家庭においても科学的な視点や身近な自然への親しみをもてるよう工夫している。



②ちょこっとサイエンスラボ

理科の面白さや探究の楽しさを直接体験する機会として、休み時間や全校集会での「ミニ実験会」を実施している。例えば、風を受けて飛ぶ種の構造を学んだ後に模型作成・実験を行う体験や、校内の自然環境を生かした「ネイチャービンゴ」等を展開している。こうした体験的な活動を通して、身近な事象と授業での学びを結び付け、楽しみながら科学的な視点を育てている。



3 千葉大会 大会主題との関連

本校がこれまで進めてきた主題・副題の趣旨や4つの視点を軸とした研究は、第57回全国小学校理科研究協議会研究大会千葉大会の基調提案と方向性を一致させ、その理念を日々の授業づくりの中で形にしていけるものである。千葉大会が掲げる大会主題「グローバル社会を生き抜く児童の育成」に対し、本研究は児童が直面する問題を「自分事」として捉え、観察・実験等の根拠に基づき自律的に答えを創り出していく「汎用的な資質・能力」の育成をもって応えている。

また、千葉大会のスローガンである「学びと指導の調和」の具現化に向け、本研究では児童の「なぜだろう」という知的な衝動や試行錯誤の保障(=学び)と、児童の思考の深化や見取りに応じた適切な価値付けや支援(=指導)を双方のバランスを意識した授業づくりに取り組んでいる。

さらに、千葉大会が求める個別最適な学びと協働的な学びの一体的なデザインや対話的な場の設定を具体化するため、付けたい「4つの力」をアイコン化して共有し、自己の学びをメタ認知し、コントロールする手立てを提案している。

このように本研究は、千葉大会基調提案の示す視点を「自分事化」や「4つの力」という本校の実践枠組みへと落とし込み、理科・生活科における指導のあり方を具現化する一つの提案とするものである。

